

子どもの意識・態度の形成因としての 親子関係に関する研究

—「親密さ」および「恐さと干渉」の影響を中心に—

中 村 真*

キーワード：親子関係，親密さ，恐さと干渉，非行許容性，恥意識

問題と目的

筆者らは、青少年を対象とする継続的な調査を通じて、彼らの道徳意識、思いやり意識、恥意識、非行・虞犯許容性といった意識・態度が親子関係を基盤にして形成されることを明らかにしてきた（中里・松井，1999；2003；2007；中里他，2003；中村他，2004；2005；松井他，2005；中里他，2005；中村他，2007；2009）。すなわち、親子関係が良好である（心理的距離が近い）ほど、子どもの意識・態度は社会的に望ましくなる傾向がある。

一方、子どもの意識・態度を健全に育むためには、親子の親密さを前提としつつも、ときには厳しさと恐さをともなう躰を取り入れる必要性が指摘されている（中里・松井，2007）。しかし、一連の研究では、親子関係の良否を測定する尺度が愛情面や尊敬、信頼といった側面に限られており、子どもの健全育成のために厳しいしつけが必要であるとの指摘は必ずしも実証的な調査データに基づくものではなかった。

そこで本稿では、子どもにとっての親子関係を、親密さを中核とする従来の心理的距離に「恐さ」や「厳しさ」に関する測定項目を加えた上で再分析し、その構造を明らかにするとともに、それらが子どもの意識・態度とどのように関連するの

を検討する。

これによって、子どもの意識・態度の形成因としての親子関係に関する研究に新たな基礎的知見を提供するとともに、将来の研究の課題と指針を導くことができると考える。

方 法

調査対象は、国内の中学生男子 195 名、女子 207 名、高校生男子 487 名、女子 158 名、大学生男子 172 名、女子 346 名の計 1,565 名であった。

調査期間は、中高生が 2004 年 9 月～12 月、大学生が 2006 年 5 月であった。各学校において、ホームルーム等の時間中に質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、次の通りである。

- ① 父および母との関係：14 項目を 4 件法で尋ねた（表 1 を参照）。
- ② 非行許容性：「人の物を盗む」など 10 項目について、「たいしたことはない」～「非常に悪いことだ」の 4 件法で尋ねた。このうち、本稿の分析で用いたのは「夜遅くまで外で遊ぶ」、「タバコを吸う」、「酒を飲む」、「エッチな雑誌やアダルトビデオを見る」、「学校をサボる」、「異性の友達と 2 人で泊まる」の 6 項目（虞犯許容性）である。なお、大学生を対象とする調査では、「これらの行為を中高生がした場合、あなたはどのように思いますか」という設問文を用いた。

表1 父および母との関係に関する質問項目

1	父(母)はなにかと私に相談する
2	父(母)は頼りがいがある
3	父(母)のようになりたい
4	父(母)とはうまくいっている
5	私は父(母)に愛されていると思う
6	父(母)は私に期待している
7	私は父(母)が好きだ
8	父(母)を尊敬している
9	父(母)は私のすることになにかと口出しをする
10	父(母)は私のいうことなら何でもきいてくれる
11	父(母)は私にあまりかまわない
12	父(母)から人に親切にすることの大切さを教わった
13	父(母)から「がまん」することの大切さを教わった
14	父(母)は自分にとってこわい存在だ

「そうである」～「まったくそうではない」の4件法で尋ねた。

- ③ 道徳意識：「人にウソをつくこと」など10項目について、「非常に悪いことと思う」～「まったく悪いこととは思わない」の4件法で尋ねた。
- ④ 思いやり意識：場面想定法(8場面, 4件法)によって測定した。
- ⑤ 恥意識：「宿題を忘れて先生にしかられたとき」など25項目について、「非常に恥ずかしい」～「まったく恥ずかしくない」の4件法で尋ねた。このうち、本稿の分析で用いたのは「自分で決めたことを守れなかったとき」など10項目(自分恥)および「授業に遅れて先生にしかられたとき」など10項目(他人恥)である。ここで言う「自分恥」とは自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいと思う恥意識を、そして、「他人恥」とは他者や社会規範を意識したときに生じる恥意識を意味する。これら2つの恥意識は、子どもの意識や態度の望ましさと関連することが確かめられている(中里・松井, 2007)。
- ⑥ 価値観：12項目を4件法で尋ねた。本稿では分析の対象としなかった。
- ⑦ フェースシート
- ③～⑥の具体的な項目内容については中里・松井(2007)を参照されたい。

結 果

子どもからみた親子関係の構造を把握するために、父母別に親との関係に関する14項目を用いて因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)。ただし、どの因子にも因子負荷が0.30に満たなかった項目、および複数の因子にまたがって因子負荷が0.30以上である項目を削除しながら繰り返し因子分析を行った。

最終的に、固有値1以上の基準により2因子を抽出した。父親との関係に関する分析結果を示したのが表2である。因子間相関は、 -0.159 である。第1因子は、「父を尊敬している」、「父が好きだ」、「父は頼りがいがある」などに対して負荷量が高く、「親密さ」因子とした。第2因子は、「父は自分にとってこわい存在である」、「父は私のことに何かと口出しをする」で負荷量が高く、「恐さと干渉」の因子とした。

また、表3の通り、母親との関係に関する分析結果も父親と同じ因子構造を示した。したがって、以下では、親子関係の「親密さ」、「恐さと干渉」の両要因が子どもの意識・態度にどのような影響を及ぼしているのかを検討する。なお、表中の+

表2 父親との関係に関する因子分析結果

項 目	因子1	因子2	共通性
	親密さ	恐さと干渉	
私は父が好きだ	<u>.866</u>	-.158	.819
父を尊敬している	<u>.841</u>	.070	.692
父は頼りがいがある	<u>.799</u>	.207	.629
父のようになりたい	<u>.730</u>	.140	.520
父とはうまくいっている	<u>.691</u>	-.281	.618
私は父に愛されていると思う	<u>.661</u>	.050	.447
父は自分にとってこわい存在だ	.181	<u>.596</u>	.354
父は私のことに何かと口出しをする	-.113	<u>.461</u>	.242
固 有 値	3.964	1.361	
寄 与 率 (%)	44.981	9.026	

重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転

表3 母親との関係に関する因子分析結果

項目	因子1	因子2	共通性
	親密さ	恐さと干渉	
私は母が好きだ	<u>.875</u>	-.128	.796
母を尊敬している	<u>.848</u>	.080	.718
母のようになりたい	<u>.743</u>	.128	.556
母とはうまくいっている	<u>.741</u>	-.203	.609
私は母に愛されていると思う	<u>.719</u>	-.050	.526
母は頼りがいがある	<u>.707</u>	.154	.509
母は自分にとってこわい存在だ	.144	<u>.584</u>	.350
母は私のすることに何かと口出しをする	-.131	<u>.338</u>	.137
固有値	4.011	1.250	
寄与率(%)	45.507	7.015	

重み付けのない最小二乗法, プロマックス回転

は $p < .10$, * は $p < .05$, ** は $p < .01$, *** は $p < .001$ を示す。

まず、調査対象者ごとに「親密さ」因子、「恐さと干渉」因子を構成する項目の平均点を対父母別に算出した。同様に、虞犯許容性、道徳意識、思いやり意識、恥意識（自分恥、他人恥）についても平均点を算出した。そして、父母に対する「親密さ」と「恐さと干渉」を独立変数とし、子どもの意識・態度を従属変数とする重回帰分析を行った（表4）。

標準偏回帰係数の値と検定結果をみると、父母に対する「親密さ」は、子どもの意識・態度の望ましさと関連している。一方、「恐さと干渉」は、父親では「親密さ」ほど影響力は大きくないが、概ね、子どもの意識・態度の望ましさと関連している。しかし、母親では恥意識を除いて子どもの

意識・態度と関連しない。

次に、「恐さと干渉」の影響が父母で異なることをふまえて、親子関係と子どもの意識・態度の関連を父母別に検討した。まず、父（母）に対する「親密さ」と「恐さと干渉」について、それぞれの平均点を境に調査対象者を親密群—疎遠群、恐高群—恐低群に分割し、その組み合わせによって親子関係を4つのタイプに分けた。同様に、虞犯許容性、道徳意識、思いやり意識、恥意識（自分恥、他人恥）についても平均点を境に2群に分割した。

表5～表14は、親子関係のタイプごとに、虞犯許容群と非許容群、道徳意識の高群と低群、思いやり意識の高群と低群、自分恥の高群と低群、他人恥の高群と低群のそれぞれの人数を集計したものである。

父親の場合、総じて、「恐さと干渉」よりも「親密さ」のほうが影響力は大きい。虞犯を許容せず、道徳意識と恥意識の高い子どもの割合が最も大きいのは、父親との関係が親密で恐さと干渉が高いタイプである。一方、虞犯を許容し、道徳意識、思いやり意識、および恥意識が低い子どもの割合が最も大きいのは、関係が疎遠で恐さと干渉が低いタイプである。つまり、父子関係においては、「親密さ」と「恐さと干渉」が子どもの意識・態度の形成に相乗的に影響していることを示唆する。

母子関係においても「恐さと干渉」よりも「親密さ」のほうが子どもの意識・態度の形成に大きな影響を及ぼしているが、その関連の程度は父親の場合よりもやや大きい。父子関係の場合と同じように、道徳意識と恥意識が高い子どもの割合が最も大きいのは、母親との関係が親密で恐さと干

表4 子どもの意識・態度に対する親子関係の重回帰分析結果

	親密さ・父	恐さ干渉・父	親密さ・母	恐さ干渉・母	R ²
虞犯許容性	-.078*	-.050+	-.083*	.036	.022***
道徳意識	.069*	.045+	.262***	.036	.096***
思いやり意識	.121***	.091**	.172***	.017	.074***
自分恥	.120***	.127***	.220***	.051+	.110***
他人恥	.086**	.121***	.268***	.044+	.121***

R²を除く数値は、標準偏回帰係数を示す。

表5 父子関係別にみた子どもの虞犯許容者・非許容者の人数

虞犯許容性	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
許容しない	180 (61.6) <u>3.0**</u>	118 (49.8) <u>-1.5</u>	244 (57.4) <u>1.7+</u>	121 (44.3) <u>-3.7**</u>	663 (54.0)
許容する	112 (38.4) <u>-3.0**</u>	119 (50.2) <u>1.5</u>	181 (42.6) <u>-1.7+</u>	152 (55.7) <u>3.7**</u>	564 (46.0)
計	292 (100)	237 (100)	425 (100)	273 (100)	1227

()内は% $\chi^2(3) = 20.85, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表6 母子関係別にみた子どもの虞犯許容者・非許容者の人数

虞犯許容性	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
許容しない	256 (61.1) <u>2.6**</u>	148 (45.7) <u>-4.3**</u>	215 (62.3) <u>2.8**</u>	103 (50.2) <u>-1.8+</u>	722 (55.8)
許容する	163 (38.9) <u>-2.6**</u>	176 (54.3) <u>4.3**</u>	130 (37.7) <u>-2.8**</u>	102 (49.8) <u>1.8+</u>	571 (44.2)
計	419 (100)	324 (100)	345 (100)	205 (100)	1293

()内は% $\chi^2(3) = 26.74, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表7 父子関係別にみた子どもの道徳意識高群・低群の人数

道徳意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
高群	163 (57.4) <u>3.9**</u>	103 (41.2) <u>-2.1*</u>	226 (51.4) <u>2.2*</u>	102 (35.7) <u>-4.4**</u>	594 (47.1)
低群	121 (42.6) <u>-3.9**</u>	147 (58.8) <u>2.1*</u>	214 (48.6) <u>-2.2*</u>	184 (64.3) <u>4.4**</u>	666 (52.9)
計	284 (100)	250 (100)	440 (100)	286 (100)	1260

()内は% $\chi^2(3) = 33.79, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表8 母子関係別にみた子どもの道徳意識高群・低群の人数

道徳意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
高群	247 (58.9) <u>6.0**</u>	113 (33.1) <u>-5.9**</u>	189 (52.9) <u>2.7**</u>	70 (34.0) <u>-4.0**</u>	619 (46.8)
低群	172 (41.1) <u>-6.0**</u>	228 (66.9) <u>5.9*</u>	168 (47.1) <u>-2.7**</u>	136 (66.0) <u>4.0**</u>	704 (53.2)
計	419 (100)	341 (100)	357 (100)	206 (100)	1323

()内は% $\chi^2(3) = 69.41, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

渉が高いタイプである。そして、恥意識と思いやり意識が低い子どもの割合が最も大きいのは、関係が疎遠で恐さと干渉が低いタイプである。

しかし、父子関係の場合と異なり、虞犯を許容し、道徳意識が低い子どもの割合が最も大きいのは、

は、母親との関係が疎遠で恐さと干渉が高いタイプである。また、虞犯を許容せず、思いやり意識の高い子どもの割合が最も大きいのは、母親との関係が親密で恐さと干渉が低いタイプである。

表9 父子関係別にみた子どもの思いやり意識高群・低群の人数

思いやり意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
高群	135 (53.1) <u>2.1*</u>	101 (42.4) -1.7+	219 (53.3) <u>3.0**</u>	107 (37.4) -3.8**	562 (47.3)
低群	119 (46.9) -2.1*	137 (57.6) 1.7+	192 (46.7) -3.0**	179 (62.6) <u>3.8**</u>	627 (52.7)
計	254 (100)	238 (100)	411 (100)	286 (100)	1189

()内は% $\chi^2(3) = 22.87, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表10 母子関係別にみた子どもの思いやり意識高群・低群の人数

思いやり意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
高群	210 (54.4) <u>2.9**</u>	127 (40.6) -3.1**	190 (55.4) <u>3.1**</u>	71 (35.7) -3.9**	598 (48.2)
低群	176 (45.6) -2.9**	186 (59.4) <u>3.1**</u>	153 (44.6) -3.1**	128 (64.3) <u>3.9**</u>	643 (51.8)
計	386 (100)	313 (100)	343 (100)	199 (100)	1241

()内は% $\chi^2(3) = 32.85, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表11 父子関係別にみた子どもの恥意識高群・低群の人数 (自分恥)

恥意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
自分恥高群	198 (63.5) <u>6.5**</u>	105 (40.2) -2.6*	236 (51.5) <u>2.1*</u>	97 (31.4) -6.4**	636 (47.5)
自分恥低群	114 (36.5) -6.5**	156 (59.8) <u>2.6*</u>	222 (48.5) -2.1*	212 (68.6) <u>6.4**</u>	704 (52.5)
計	312 (100)	261 (100)	458 (100)	309 (100)	1340

()内は% $\chi^2(3) = 72.54, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表12 母子関係別にみた子どもの恥意識高群・低群の人数 (自分恥)

恥意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
自分恥高群	263 (58.3) <u>5.6**</u>	141 (39.4) -3.5**	205 (54.1) <u>3.1**</u>	61 (27.0) -6.7**	670 (47.4)
自分恥低群	188 (41.7) -5.6**	217 (60.6) <u>3.5**</u>	174 (45.9) -3.1**	165 (73.0) <u>6.7**</u>	744 (52.6)
計	451 (100)	358 (100)	379 (100)	226 (100)	1414

()内は% $\chi^2(3) = 75.33, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

考 察

従来の研究と同じく、親が好きで頼りがいがあり、親を尊敬やあこがれの対象としている子ども

は、社会的に望ましい意識や態度を形成しやすいことが確認された。これに、親の恐さと干渉が加わった場合に、子どもの健全育成はさらに促進される可能性が示唆された。ただし、この傾向は父子関係においては、どの意識・態度においてもほ

表 13 父子関係別にみた子どもの恥意識高群・低群の人数 (他人恥)

恥意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
他人恥高群	199 (64.6) 5.5**	120 (45.1) -2.1*	248 (55.0) 2.2*	111 (35.9) -6.0**	678 (50.8)
他人恥低群	109 (35.4) -5.5**	146 (54.9) 2.1*	203 (45.0) -2.2*	198 (64.1) 6.0**	656 (49.2)
計	308 (100)	266 (100)	451 (100)	309 (100)	1334

()内は% $\chi^2(3) = 57.48, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

表 14 母子関係別にみた子どもの恥意識高群・低群の人数 (他人恥)

恥意識	親一恐高	疎一恐高	親一恐低	疎一恐低	計
他人恥高群	282 (63.5) 6.5**	134 (36.9) -6.1**	217 (57.9) 3.2**	80 (36.0) -4.8**	713 (50.8)
他人恥低群	162 (36.5) -6.5**	229 (63.1) 6.1**	158 (42.1) -3.2**	142 (64.0) 4.8**	691 (49.2)
計	444 (100)	363 (100)	375 (100)	222 (100)	1404

()内は% $\chi^2(3) = 83.57, p < .001$ 下線付き数値は調整済み残差。

ば一貫しているが、母子関係では意識・態度の種類により様相が異なる。すなわち、親密さが欠けたままで恐さと干渉が加わると、子どもの一部の意識や態度が極端に悪化する傾向や、恐さと干渉が低くても親密さが高ければ、別の意識や態度はむしろ最も望ましくなる傾向さえも認められたのである。

これらの結果は、子どもの意識・態度の形成因としての親子関係には、情緒面や尊敬、信頼といった側面だけではなく、厳しさをともなう躰の側面も包含されること、および、その様相が父子関係と母子関係とではやや異なるものであることを示唆する。親の恐さや干渉・叱責が子どもの意識・態度に及ぼす影響について、その効果のあり方が父母で異なる原因も併せてさらに詳しく検討していく必要がある。

参考文献

- 松井 洋・中里至正・片山美由紀・中村 真・堀内勝夫 2005 非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究 (財)社会安全研究財団 平成 15 年度研究助成報告書 43-56.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之 2004 恥意識の行動抑制効果に関する研究(3) —

親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響 — 日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集 520-521.

- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓 2005 親子の心理的距離と恥意識の関係 日本パーソナリティ心理学学会第 14 回大会発表論文集 99-100.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 2007 親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ — 親子双方の視点から — 川村学園女子大学研究紀要, 第 18 巻第 1 号 123-140.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 2009 親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ — 親からみた親子関係と恥意識の形成 — 川村学園女子大学研究紀要, 第 20 巻第 1 号 91-101.
- 中里至正・松井 洋 1999 日本の若者の弱点 毎日新聞社
- 中里至正・松井 洋 2003 日本の親の弱点 毎日新聞社
- 中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之 2003 非行抑制要因に関する社会心理学的研究 平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究(C) (2) 研究結果報告書
- 中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓 2005 恥意識の行動抑制力に関する社会心理学的研究 平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究結果報告書
- 中里至正・松井 洋 2007 「心のブレーキ」としての恥意識 — 問題の多い日本の若者たち — プレーン出版